昭和51年5月9日第三種郵便物認可　昭和55年12月1日発行（毎月一回発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ No.109

●特集　1979HAJ登山学校報告

1980 DEC.

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1981年ヒマラヤ登山学校隊員募集
——ナンダ・カート（6611m）—— 許可取得!!

ＨＡＪでは１人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来四度にわたって延べ９０名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は確かな技術と経験を有する指導者（インストラクター）の統活のもとに、安全確実を第一にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の修得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしており、単なるパック登山とは全く異なっています。

８１年度は、ガルワールヒマラヤの名峰ナンダ・カート（6,611ｍ）にて実施する予定でおります。ふるって御参加下さい。

実施要項

目　的　①ナンダ・カート（6,611ｍ）登頂
②ヒマラヤ登山の基礎修得

時　期　1981年9月13日～10月12日
２９日間（ＢＣ以上の登山期間１５日）

負担金　６９万円

定　員　２０名（申込順）
インストラクター４名（ドクター含む）

申込み　1980年12月末までに下記宛申込むこと（資料を送ります）
〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
淀橋食糧ビル506　日本ヒマラヤ協会
TEL　03-367-8521

この登山隊の旅行手続は、㈱西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

****

表紙の言葉

田村俊介

カベリ氷河の最奥にあるチョゴリザ南壁は、下部の雪壁と上部の三段階に分れたピラミッド型の岩壁とから構成されている。幅広い雪の東壁に代表されるこれまでのチョゴリザとは、まったく異質の印象を与えられる。

ヒマラヤ No.109

1. ヒマラヤ放談 ——坂下直枝
4. ヒマラヤニュース＜地域・トピックス・インフォメーション・新刊＞
7. 日本ヒマラヤ会議報告
8. 特集　1980HAJ登山学校報告・ケダルナート・ドーム登頂
17. 東京都山岳連盟海外登山研究会報告
18. 連載　遠征学入門⑲ ——清水澄
20. トレッキング許可で登れる山③＜コンデ・リ＞——岩橋崇

ヒマラヤ放談

今春カンチェンジュンガの覇者となった彼、坂下直枝氏はこの冬、単身アンナプルナへ向うという。冬期に単独で8,000メートル峰をというのは世界でもまだ例がない。今月は冬のアンナプルナをどう登るかに焦点をあててインタビューを試みてみた。この本が出る頃、彼はもうネパールにあって偵察を終え、本番に向ってスタートしていることだろう。

坂下 直枝

●『いいんじゃないか』と考えて……

―― 今度は冬のアンナプルナへ1人で行かれるそうで……。すごい計画ですが、いつ頃思いたったんですか？

坂下 去年の5月頃ですね。カンチの許可交渉でネパールへ行った時に冬のシーズンがオープンになると聞いたもんだから……。で、夏にシャルマ氏（ネパール政府観光省登山局長）が来日した時に仮申請書を出しておいた。

―― 最初から1人でやろうということだったんですか？

坂下 最初は2人ぐらいでと考えていました。1人で行こうと決めたのは、去年の暮頃のことです。

―― 特に意識的に単独にしたんですか？ それともたまたまパートナーが得られなくて1人になったわけですか？

坂下 この場合、パートナーといっても条件が絞られるでしょ。アルパインスタイルで高所活動のできる人間となると、同志会でも非常に限られてくる。一番いいのはカンチをやった仲間なんですが、この連中は今は帰ってきたばかりで金も暇もなかなか自由にならない。あとはカンテガやタムセルクに行った若手の中からということになりますが、どうも今ひとつ絞り切れなかった。そこでちょっと発想を変えて1人で行けないものかと考えてみた。考えてみるといいんじゃないかと思うようになった。「いいんじゃないか」ってのも変なハナシだけど(笑)。

―― 坂下さんのキャリアからすれば「いいんじゃないか」なんでしょうけど(笑)。ただ一般的にはものすごいことですよ。

坂下 冬で1人ってのは、世界でもまだないですよ。

―― やるにあたってどんな気持？ よーし、一発っていうようなしゃかり気になった気持ですか？

坂下 いや、そういうのあんまりないんです。まあ、ないっていったらちょっと語弊があるけど、重圧感はあまりない。というのは、この春もうまくカンチに登れたし、8,000ちょぼちょぼの所なら、合計4往復ぐらいしている。そこで雪洞掘ったりもしたけど、結構作業もできるんですよ。だから8,000チョボチョボぐらいなら自分なりに動ける自信があるわけです。あと技術的にはアンナプルナの場合はそれほどめんどうではないし。

●精神的には冬のアルプス

―― ルートはどっちを選びます？ クラシックルートとオランダルートと……。

坂下 まだ決めてないんですよ。実際に行って見てから決めるつもり。フィックスは400メートルしか持ってかないから、おのずと登はんルート

は限定されてしまうでしょう。

―― 登り方はどんなふうにするんですか？

坂下 あそこは普通キャンプ５つなんです。

―― 静岡隊も５つでしたね。

坂下 そう。フランス隊も５つ。これを３つに減らすつもり。キャンプ間が遠くなって大変だけど、減らさないことには荷上げが多くなりすぎてどうしようもない。Ｃ１かＣ２ぐらいまではシェルパを使います。これは２人予定している。

―― 登山期間はどのくらいですか？

坂下 短期間です。ＢＣ以上２０日くらいかな。お金もあんまりないし、あと精神的には冬のアルプスの登はんと同じだと思う。寒気と風がものすごいし、１カ月も２カ月も１人でそういう情況に耐えられるかというと、これはちょっとむづかしいと思う。だから１２月１日～２０日と最初から決めておいて、その期間内に決着をつけるつもり。２０日までに登れなければあきらめるよ。かなり賭的な要素が強いと思う。

―― キャンプ展開はどんなふうにするんですか？

坂下 ＢＣが4,400、そこから1,200あがって5,600か、できることなら5,800にＣ１。そのあと6,500～6,600ぐらいにＣ２。ファイナルは7,500ぐらいと考えている。

―― ファイナルはかなりあげるんですね。

坂下 春か秋なら、7,000ぐらいの所から8,000をかせぐのはそう困難なことではない。この前のカンチでも7,900から8,600まで標高差700のアタックだった。8,000を抜いた高度で充分１日で700かせげたわけだから7,000～8,000間ならまず1,000はかせげると思う。だけど冬でしょ。行動時間がぐっと短縮されてしまう。まず朝のスタートがどうしても７時ぐらいになってしまうと思う。そこへもってきて日の暮れるのが早い。４時ぐらいにスタートして夜の８時ぐらいまで行動できる季節とは訳が違う。気象条件も当然厳しいし、だから冬の場合ファイナルはどうしても高くあげる必要がある。

―― 荷上はかなりあるんですか？

坂下 けっこうあるんです。ＢＣより上が150kg、まあないといえばないけど、でも１人の荷物としてはかなりヘビーですよ。だからＣ２まではシェルパに手伝ってもらわないと、僕１人ではあげ切れない。春や秋に比べると装備なども根本的に違ってきますから、どうしても重くなってしまう。

―― 今回の登山のために何か特別な装備を用意されたんですか？

坂下 ええ、テントとか衣類は意を用いました。まず衣類はダクロンの下着を着て、その上にまたダクロンの上下、その上に羽毛服上下、もし寒かったらさらにもうひとつ大型の羽毛服を着ようかと思っている。

―― モコモコになりますね(笑)。

坂下 ええ、モコモコ。ただ7,500から上っていうのは斜面が一定していますから、それでも充分動けるんじゃないかと思う。傾斜はたぶん２５度ぐらいだろうから、富士山の上のほうより寝ている。ただジェットストリームで雪がみんな飛ばされて蒼氷になってるんじゃないかな。だからアイゼンはしっかり研いでいくつもり。

● 10～11月に偵察、12月本番

―― 気温はどのくらいと踏んでいますか？

坂下 カンチの時、３月中旬の4,500でマイナス２０度だった。これが４月に入ると０度まであがっちゃうんだけど、厳冬期だとＢＣの位置で30度ぐらいいくんじゃないかと思う。そうすると8,000ではマイナス50度という計算になってくる。

―― テントはどういうのを使うんですか？

坂下 ドーム型で普通のより支柱を１本多くしてテープを貼ったりして強度を強くします。アイゼンの着脱などはテント内でできるようにして、キジもテント内でできるように細工する。

―― その点、１人というのはいいですね。

坂下 ええ、何をやってもかまわない。くさいのは自分が我慢すればいいだけだし(笑)。

―― １０月９日に出発して、アンナプルナにとりかかる前にどこかで順応トレーニングみたいなことをやるわけですか？

坂下 順応っていうか、偵察をしようかと思ってる。というのはキャラバンルートが悪いんですよ。途中にトロブギン峠という4,300の峠がある

んだけど、ここが雪が深い。この峠からまた3日ぐらいかかるんだけど、ポーターが行きたがらない。そこの所のトランスポートが問題なんです。

―― 10月のうちに運んでおくというのは？

坂下 盗難の恐れがあるから、ちょっとできないですね。本番の時に何とか方法を講じて運び込むしかない。時と場合によってはヘリも考えている。ただ、お金のほうが厳しくてね。

―― お金のほうはどのくらいかかるんですか。

坂下 300万くらいかかる。支給品にかなりかかるんですよ。それから人件費にしてもそのトロブギン越えの時ポーター1人50ルピーが相場というから……。

―― 秋とか春の相場がですか？

坂下 ええ、冬ならもっとかかるでしょう。まあ大雑把にいって国内150万、国外150万というところかな。もしヘリを使うとなると、またもっとかかる。

―― どこかスポンサーがついてるんですか？

坂下 いや、今のところまったくないです。殆ど借金ですよ。

●いい計画はのってる時に……

―― 今後のことですが、もうジャヌーのような包囲作戦はやるつもりはないんでしょうね。

坂下 まったくないですね。これからは大登山隊というのは、社会的にも難しくなってくると思いますよ。

―― 83年にはエヴェレストの計画をお持ちですね。あれはどんなふうにやりますか？

坂下 4～5人で、まあアルパインスタイルとまではいかなくても、カンチよりもう少しスマートにして無酸素で南西壁へ行きたい。ただ許可のほうがどうなるかですが……。

―― 東南稜に行く隊があるんでしょ。

坂下 アメリカが東南稜に行く。この隊の了解をとらなければならない。

―― 南西壁はどっちのルートへ行かれます？

坂下 うーん、その辺はまだ決めてない。あそこの壁はものすごく資料が揃ってるし、同志会の中でも行った人間は多いから検討材料には事欠かない。でもカンチより250メートル高いからね。そのカンチにヨタヨタで登ってるから、そこから250というとかなり大変だと思う。

―― 大変でしょうけど、でもすごくのってる時だから突っ込めるんでしょうね。

坂下 こう、なんていうか人間ってのはのってる時と沈んでる時と波があるんですね。

―― それは本当にありますね。

坂下 ワァーッと燃えてる時じゃないと遠征なんてできないよね。で、ひとつの目標に向って燃えてる時ってのは、次々と新しい計画が生まれるものなんだなあ。

―― そう、遠征の計画ってのは、遠征の準備をしてる時に生まれることが多いですね。

坂下 今度のアンナの計画もカンチの準備で忙しく動いていた時に考えついたことだしね。ジャヌーの準備をしていた時は、ノシャックをアルパインスタイルで登ろうという発想があった。死んだ大木と二人でね。当時はまだヒマラヤでのアルパインスタイルなんてまったくなかったから、新鮮味がありましたよ。実際には、ジャヌーに登頂できなかった隊員を一人たきつけて、あと坂野先生と三人で行ったけど、ひどい高度障害にかかって逃げ降りてきた(笑)。いずれにしても精神的な高揚期ですよ。

―― そういう時代にやれるだけのことをやりたいものですね。アンナプルナがんばって下さい。今日はありがとうございました。

（インタビュー構成：角田不二）

カンチェンジュンガ遠征隊募金について

1981年HAJが主催するカンチェンジュンガ遠征隊は、8,500m三山を縦走するという空前絶後の計画です。HAJ会員一人一人の皆様のご協力を是非お願い申し上げます。

≪募金要領≫

○金額　1口　1万円

○払込　日本ヒマラヤ協会（カンチ）

地域ニュース

≪インド≫

シッキム・ヒマラヤオープン!?

ニュー・デリーのエージェントCOX＆KINGS社のGUPTA氏からの情報によると、シッキム・ヒマラヤが来年度より外国人登山隊に向けてオープンされるとのことである。協会では早速ＩＭＦ事務局長のムンシー・ラム氏にこの件につき問い合わせてみたが、同氏からは確たる解答は得られなかった。しかしGUPTA氏はデリーの有力山岳会のメンバーであり、その情報にはある程度の真憑性はあると考えられる。同氏の話によると、オープンされる地域は西部シッキムで、パンディム（6,691m）、ゴーチャ・ピーク（6,127m）、ガブルー連峰などがその対象になるとのことである。しかしカンチェンジュンガのシッキム側からの登山については、解禁の可能性は今のところまったくないと語っていた。

トピックス

ネパールに水彩絵具を寄贈

この夏、銀座アートホールにてネパール油絵展を開催した藤江幾太郎画伯（本会監事）は、ネパール美術家協会（ＮＡＦＡ）に国際美術家連盟（IAA）日本委員会を通じ、水彩絵具を贈ることとなり、さる８月４日寺田竹雄ＩＡＡ日本委員長及びホルベイン工業の吉田肇代表とともにネパール大使館を訪問、大使に謁見し伝達方を依頼した。

なお画伯は１０月２３日より３ヵ月の予定でネパールへ取材に出かけており、ＮＡＦＡとの交流も行なってくる予定でいる。

訃報

照井博氏ガネッシュⅢに逝く

会員の照井博氏（35）は、ネパール愛知合同ヒマラヤ登山隊（今井祥司隊長）の隊員として、ガネッシュヒマールⅢ峰（7,130m未登峰）をめざして活動中雪崩に襲われ、他の２隊員とともに行方不明になった。氏は昨年のＨＡＪ登山学校キャシー・ドラル隊の隊員であったが、同隊の佐々木正インストラクターによると隊の中で最強であったとのことで、その死が惜しまれる。

インフォメーション

高所順応研究会

東京都山岳連盟では、遭難事故の要因に高所順応不足が非常に多いことを鑑み、下記の要領で高所順応研究会を開催する。

◇日時　昭和55年12月24日(日) AM9:00～PM4:00
◇場所　東京都勤労福祉会館（地下鉄東西線八丁堀駅下車徒歩１分 TEL03-552-9131）
◇定員　100名（定員になり次第締切り）
　　一般参加可
◇会費　3,000円（昼食代、資料代含む）

ハガキにて住所・氏名・所属団体・登山計画のある人は登山隊名を記入して申込んで下さい。開催要項を送ります。申込みと同時に下記口座へ会費を払込んで下さい。
（富士銀行神田支店普通預金824677
土居正勝）

※遠隔地の方は前夜宿泊可能です。御希望の方はその旨、ハガキに御記入下さい。

ヒマラヤ集会

◇ 11月29日(土)　栃木県小山市
◇ 12月 6日(土)　茨城県水戸市

※周辺地区の方には追って詳細をお知らせします。遠隔地で参加希望の方は事務局（03-367-8521）までお問合わせ下さい。

ネパール語を教えます

日本語を勉強するため来日中のネパール青年、Ｒ・シュレスタ君が、ネパール語を教えることを

希望しています。同君は東京に在住中ですので近辺の方で興味のある方は下記へお問い合わせ下さい。尚、本人は日本語の日常会話に不自由しません。

新刊図書一覧

①潘絜茲・著／土居淑子・訳、「敦煌の石窟芸術」1980・9、V＋201p、420円、（中公新書589）

②中野美代子、「孫悟空の誕生 ── サルの民話学と「西遊記」 ──」、玉川大学出版部、1980・10 294p、1,800円。

③平山郁夫／岩崎吉一・解説、「現代日本画全集 ── 平山郁夫 ──」、集英社、1980・9、132p、4,800円、（現代日本画全集第18巻、正価5,600円）。

④平山郁夫、「シルクロード素描集(2) ── 敦煌への道 ──」、平凡社、1980・9、130p、3,800円。

⑤辻直四郎・訳、「バガヴァット・ギーター」、講談社、1980・9、416p、3,200円、（インド古典叢書）。

⑥大野徹・井上隆雄、「ビルマの仏塔」、講談社、1980・9、152p、3,800円、（世界の聖域・第10巻）。

⑦トーマス・ホーヴィング著／屋形禎亮・榊原豊治／訳、「ツタンカーメンの秘密」、白水社、1980・9、332p、3,200円。

⑧山折哲雄、「インド・人間」、平河出版社、1980・9、267p、1,500円。

⑨辛島昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一／著、「インダス文明」、日本放送出版協会、1980・10、242p、750円、（NHKブックス・375）。

⑩中村元、「ナーガルジュナ（龍樹）」、講談社、1980・10、376＋4p、1,500円、（「人類の知的遺産」、第13巻）。

⑪井上靖・長沢和俊・NHK取材班／共著、「流砂の道 ── 西域南道をゆく ──」、日本放送出版協会、1980・10、271p、1,700円。（「シルクロード・絲綢之路」、第四巻）。

⑫岡部一彦、「山の足あと」、東京新聞出版局、1980・9、288p、1,500円。

⑬趙樸初・塚本善隆／監修、日中友好仏教協会・中国仏教協会・編、「中国仏教の旅・3」、美乃美、1980・9、200p、2,000円。

⑭並河亮、「ペルセポリス ── ペルシアの巨大遺跡 ──」、芙蓉書房、初版・1975、改頂新版・1980・10、332p、2,300円。

⑮真鍋俊照、「曼荼羅美の世界」、人文書院、1980・10、297p、2,800円。

⑯大内穂・編、「危機管理国家体制 ── 非常事態下のインド ──」、アジア経済研究所、1980・6 290p、2,600円、（「アジア経済研究所研究双書」、291）。

⑰貴州省哲学社会科学研究所・編、「夜郎考 ── 討論文集之一 ──」、貴陽（貴州省・中国）、貴州人民出版社、1979・2、273p、051元＝310円、（中国語版、初版11,040部）。

⑱喩翠容・編著、「布依語簡志」、北京、民族出版社、1980・7、105p、0.36元＝220円、（≪国家民委民族問題五种叢書之一≫、中国少数民族語言簡志叢書、中国語版、初版4,000部）。

⑲韦慶稳・覃国生／編著、「壮語簡志」、北京、民族出版社、1980・7、132p、0.43元＝260円、（≪国家民委民族問題五种叢之一≫、中国少数民族語言簡志叢書、中国語版、初版4,500部）。

⑳布林特古斯・編、「蒙語正音正字詞典」、包頭（内蒙古自治区・中国）、内蒙古教育出版社、1977・10、914p、3.00元＝1,200円。

㉑莫東寅、「満族史論叢」、北京、生活・読書・新知三联書店、1979・9、2版、205p、0.54元＝320円、（中国語版、2,600部、1958・8、一版）。

㉒中国科学院青蔵高原総合科学考察隊・中国登山隊／編、「珠穆朗瑪峰地区科学考察報告(1975)・高山生理」、北京、科学出版社、1980・4、256p、4.20元＝2,200円、（中国語版、精装本＝1,230部、平装本＝1,250部）。

㉓平山郁夫、「悠久の流れの中に」、佼成出版社、1980・9、229p、1,600円、（付・年譜）。

㉔F・ハリデー著／岩永博・菊地弘・伏見楚代子／訳、「イラン ── 独裁と経済発展 ──」、法政大学出版局、1980・9、359p、2,800円。
㉕深田久弥、「わが山々」、中央公論社、1980・10、223p、300円、（中公文庫、M135）。
㉖岡部清子、「私のアンカラ日記」、札幌、ノーム・ミニコミセンター、980円。
㉗池田温・編、「敦煌の社会」、大東出版社、1980・8、XII＋485p、6,000円、（講座敦煌・第三巻）。
㉘前嶋信次・訳、「アラビアン・ナイト・第11巻」、平凡社、1980・10、8p＋350p＋17p、1,800円（東洋文庫・388）。
㉙ ── 、「シルクロード ── 旅とロマンの本 ──」笠倉出版、1980・11、162p、2,000円、（Sakura Mook 2）。
㉚イヴォン・シュイナード著／坂下直枝・訳、「アイスクライミング」、山と溪谷社、1980・10、213p、1,800円。
㉛北條賢三、「インド文化への回帰」、第一書房、1980・ 、260p、1,600円、（大正大学選書・2）。

（資料：藤井　毅）

新入会員名簿　55.7.29～10.21

会員番号	氏　名	入会年月日
1451	小暮利江	55. 7.29
1452	Suwadesh Kumar	7.29
1453	速水　豊	7.29
1454	伊藤　守	8. 5
1455	武井　博	8. 5
1456	須田栄一	8. 5
1457	大竹重信	8.12
1458	加呂真紀子	8.15
1459	柏木恒造	8.18
1460	山崎幸二	8.26
1461	名塚達夫	9. 8
1462	星野通明	9.13
1463	桶川和気夫	9.13
1464	松岡憲二	9.20
1465	小馬恒雄	9.22
1466	山本春雄	9.22
1467	白石宣夫	9.30
1468	大崎健司	9.30
1469	藤原一孝	10. 7
1470	林　邦博	10. 7
1471	鈴木治三郎	10. 8
1472	吹田有徳	10.18
1473	三宅世展	10.21

日本ヒマラヤ会議報告(高知・福岡)

高知会場

日時　昭和55年10月25日(土)13時～16時30分

前夜の雨も上がった土曜日の午後、四国で初めて開かれるヒマラヤ会議に３２名の参加を得た。

会議は先ず今回の事務局を担当していただいた国沢鎮雄氏の司会で始まり、山崎清憲・高知県山岳連盟会長の歓迎のあいさつがあった。13時30分から山森事務局長が配布した資料にもとづいて、「トレッキング許可で登れる山、6,000m台の山の登山」について分析し諸問題について解説した。資料によれば特にネパールの6,000 m峰の死亡事故は他に比べて際わだって多いことが指摘された。その原因については幾つかが上げられたが、トレッキングの延長で登れる「山」はなく、許可の方法や内容を称して「トレッキング許可で登れる山」となっていることを認識する必要があることが強調された。

１５時から山森事務局長により、ネパール、パキスタン、インド、中国のヒマラヤ地域の最近の登山情勢が報告された。特に大幅に登山規則の改正を行なったネパールについては、物価の値上り、入手しづらい物等も含めて詳細に行なわれた。

15時40分からは、本年度20名中19名が登頂するという成果を上げたＨＡＪ登山学校ケダルナート・ドーム隊、３月から６月にかけて行われたカンチェンジュンガ縦走の偵察隊並びにカラコルム登山の模様がスライドにより報告され16時30分全日程を終えた。

四国のヒマラヤ登山熱も高知を中心に高まって来ており今後の一層の活躍が期待できる。

福岡会場

日時　昭和55年10月26日(日)10時～16時

雨上がりとはいえ肌寒く強い風の吹く天候の中東京・名古屋から講師を迎え３８名の参加を得た。

山森事務局長の司会により中島信行福岡県山岳連盟副会長の歓迎のあいさつがあった。10時30分日山協海外常任委員でありカンチ縦走隊の隊員でもある尾形好雄氏が「トレッキング許可で登れる山、6,000峰登山の諸問題」について話された。氏は、本年度ＨＡＪ登山学校の隊長として6,000m峰を経験したばかりなので、体験をもとに環境順応、高所順応を中心に話された。又、高所登山を志すための肉体的トレーニングの必要性を説き特に継続することが重要であると述べ、そのための方法としては、日常生活の中で工夫してトレーニングすることを勧めていた。

昼食後の１３時３０分から山森事務局長による「最近１０年間の日本隊によるヒマラヤ登山の死亡事故」について解説された。

１４時からは、ネパール、インド、パキスタンの各国の最新登山情報が、三講師から報告され、質疑を混えて熱心に続けられた。

15時30分からは、1979年ラトックＩ峰、1980年ジュトマル・サール峰の共に初登頂を成し遂げた横浜蝸牛山岳会々員でカンチ縦走隊の隊員でもある渡辺優氏からスライドを使って両峰の登山の模様が詳細に報告された。

こうして熱気溢れる６時間は、あっという間に過ぎ閉会の後も地元諸氏の取り計らいにより参加者の有志で博多の街へと繰り出し、登山談義に花を咲かせていた。

長崎ヒマラヤ集会報告

日時　昭和55年10月27日19時～21時 於長崎市

高知、福岡のヒマラヤ会議から足を延ばした山森事務局長を迎えてＨＡＪ長崎会員のほとんどが参加して行なわれた。最近のヒマラヤ各国の情勢、ヒマラヤの事故等の話しの後、登山学校、カンチ偵察の模様がスライドで報告され、最近のＨＡＪの事業や社団化についての報告がなされた。会場の時間の都合で長崎の街へ場所を移してからもヒマラヤ登山談義が夜遅くまで繰り広げられた。

ケダルナート・ドーム登頂

6831m

日本ヒマラヤ協会インドヒマラヤ登山隊

1980HAJ登山学校は、ガンゴトリの名峰ケダルナート（6,940m）において行なわれた。出発直前になって、隊長、副隊長、ドクターが参加不可能になるという重大問題が発生したが、急遽尾形インストラクターが隊長に就任、カンチェンジュンガ隊から山田、角田がピンチヒッターとして参加するなどの処置で切り抜けた。結果は本峰こそ断念したものの、ケダルナート・ドーム（6,831m）に19名の大量登頂を果すことができた。が、協会側の運営態勢としては今後に大きな問題を残した登山学校でもあった。

行動概要

尾形 好雄

土砂崩れで待機

9月4日、先発隊として隊長と北出の2名が、AI－309便にて空路、デリーへと飛び立つ。

深夜のデリー空港で関隊員と女子雪氷隊の浅野さんの出迎えを受けホテルに落ち着く。関隊員は今年7月より神奈川大学II部ワンダーフォーゲル隊のビエンガパ（カシミール）登山に隊長として参加しており、当ケダルナート登山には現地から加わった。

翌5日から8日までの4日間は、デリーに於ける先発業務として隊荷の通関、IMF、日本大使館への挨拶、デポ品のチェック、装備・食糧の現地購入品の買い出し……等、連日慌ただしい日々を送る。

9月9日、先発隊の3名は、女子雪氷隊の先発2名と一緒にデリーを出発し一路ベース・キャンプへ向う。先発隊の初日は、チャーターしたデラックス・コーチに隊荷と共に乗り込んでデリーからウッタルカシへ向う、15時間にも及ぶドライブにうんざりしながらも22時、ウッタルカシに到着した。

今回のキャラバン用ポーターは、このウッタルカシで雇うことにしていたが、前日（8日）にガンガニ～ダブラニ間で土砂崩れがあって通行不能になっているというのでポーターの雇用を見合わせて10日は停滞となる。この日の午後、ポーターのアレンジを頼んでいたGarhwal Mandal Vikas' Nigam社に立ち寄り、その後の復旧の見通しを聞くも、その内容は4日位はかかるだろうとか明日は通れるかも知れないとか、いろんな情報が乱れ飛び、どれを信じてよいのか迷ってしまう。とりあえず、明日ブキまで行き現場を自分の目で確めてからキャラバンのゴー・サインを出すことにする。

翌、9月11日、尾形、関、リエゾン・オフィサー、G・M・V・N・Lのボス4人でブキへと向う。ウッタルカシからブキまでは、約34㎞の道のりであるがオンボロバスの定期便では約3時間近くもかかる。

ブキに着いたらネルー登山学校と目黒労山の両隊が出発するのに賑わっており、この出発風景を

見てボスがいうには、今日これだけの人間が通れば明日は大丈夫であるからわざわざ現場を見る必要はないというので乗って来たバスでまたウッタルカシへ戻り、午後は翌日の出発準備に勤しむ。

本隊と合流

9月12日、バス2台に隊荷、ポーター共々乗り込んでブキへと向う。

ブキからはバギラティ河の右岸につけられた車道を小1時間も歩くと温泉のあるガンガニに着く。ガンガニで道は左岸に渡り、暫くすると対岸に1978年のバギラティ河大崩壊の爪跡が俯瞰出来る様になり、間もなくダブラニである。ダブラニ・ランカ間の55㎞は、またバスになり約2時間でランカに着く。

9月13日、ランカ・バイロンガティの間は、大ゴルジュ帯となっており、深く切れ落ちた谷のためバスは通れず徒歩となる。小1時間の登り下りに一汗かくとバイロンガティでここからガンゴトリ迄はまたバスとなる。危げなバスに揺られること30分程でヒンズー教の聖地ガンゴトリに着く。

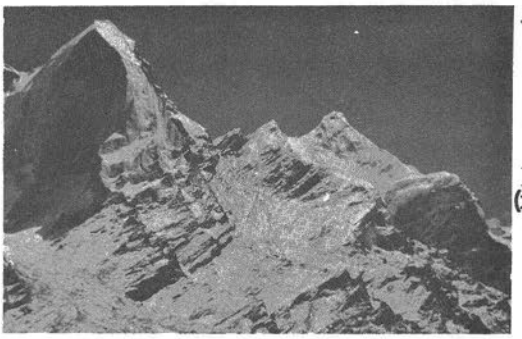
この日は、当初ボジュバサ迄行く予定であったがポーター達はチルバサから先へ進もうとはせず結局、チルバサ泊りとなる。

9月14日、この日はガウムク迄のわずか7㎞という短かい行程でポーター達も時間をもてあまし気味の様子であった。ガウムクにはネルー登山学校の前進基地が有り、我々はパオの様なテントを借用して一夜を送る。

9月15日、ナンダンバンのBCに向う女子雪氷の先発隊と別れ、我々はガンゴトリ氷河の舌端の上を横切ってタポバンのBCに入る。我々のBCはとりあえず東大のシブリン隊のBC跡に構えることにし隊荷をキープする。

9月16日、早速、この日からA•BCの荷上げを開始し、この日キルティ氷河左岸のサイド•モレーン上にA•BCを建設する。A•BCへのルートはシブリンの裾をからむようにつけられており、途中絶えず落石のあるモレーン帯のトラバースには肝を冷やされる。

我々の隊荷をキープしたBCより約40分程タポバンの曠野を突切った所にBCに格好な場所があったのでBCをこちらへ移すことにし、翌9月17日から本隊の到着迄、BCの移動にかかる。



◀バギラティⅢ(左)とⅠ

一方、9月13日に日本を出発した山田副隊長以下16名の本隊は、18日に会員元気にボジュバサに到着した。翌19日、本隊々員はボジュバサからBCをピストンして高度経験を踏み、20日に全員BCへ上がった。但し、高度順化が遅れている者は旧BC泊りとし、翌日新BCへ上がらせた。

全隊員ファイナルに到達

丁度、本隊がBCに着いた19日からガンゴトリ氷河一帯の山々は悪天候に見舞われタポバン附近迄白銀の世界と化す。

3日間続いた悪天候も過ぎ去り、いよいよポスト・モンスーンの好天が訪れた。

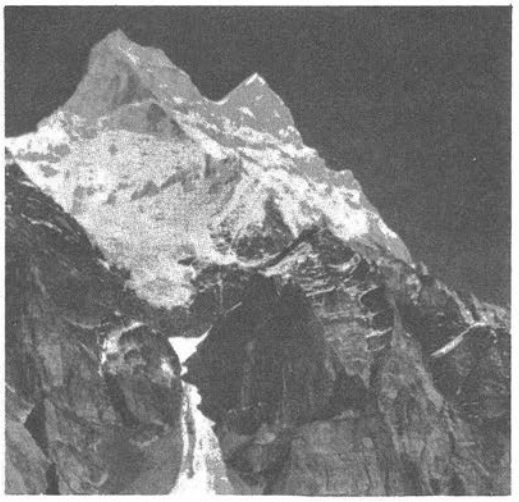
9月22日、A•BCへの荷上げを再開し、この日尾形、関の2名はA•BCに入り、順化の遅れている2名はボジュバサへ下らせる。

降雪後のモレーン帯の通過は落石が物凄く最悪のコンディションであった。

9月23日、前日A•BC入りした尾形、関の2名はC1のルート工作に向う。まず、A•BCからなるべくアルバイトの少ないルートを通りながらキルティ氷河を横断してケダルナート・ドームから右下へ派生している冗長な尾根に取り付く。岩屑混りの雪道は膝位のラッセルを強いられ思いのほか高度が稼せげずこの日の最高到達点は5,415m迄で荷物をデポして下る。この日は、新たに10名がA•BCに入る。

9月24日、C1(5,550m)建設。A•BC入りした隊員のうち11名でC1建設に向う。一度トレールが着くと前日の苦労が嘘の様にピッチが上がり、正午過ぎにはC1に辿り着く。

9月25日、前日のC1荷上げを見て体調の良さ



▶裏側（キルティバマク）よりのシブリン

そうな山田、新郷、関、高瀬、藤岡の５名をこの日Ｃ１泊りとする。また、ボジュバサへ下っていた隊員も体調を取り戻してA•BCに上がって来てようやく全員が本格的登山活動に出揃う。

9月26日、Ｃ１入りした５名は、この日６時前から行動を開始し、Ｃ２へのルート工作へ向う。ドームへと続く尾根は、将にスキー滑降に適した冗長な斜面となって続いており、その中を膝迄のラッセルを強いられながら遅々とした歩みで一歩一歩高度を勝ち取り、正午過ぎにＣ２予定地（6,280m)に到着する。途中、クレバス帯と雪壁の所に100mのフィックスロープを施こす。

この日は、新たに１０名がＣ１に入り計１５名がＣ１泊りとなる。

9月27日、昨日Ｃ２を建設した５名はこの日A•BCに下って休養に入り登頂体勢に備える。

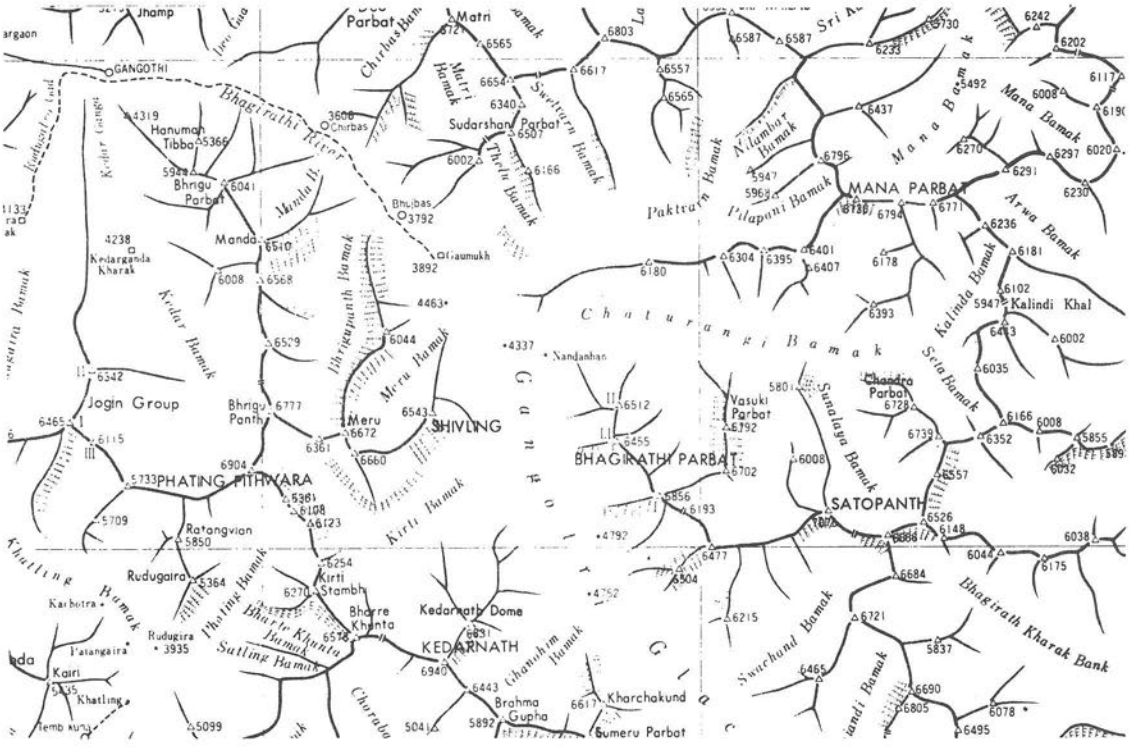
一方、前日Ｃ１入りした１０名はＣ２の荷上げに向い、6,330m迄の高度経験を踏む。さらに順化の遅れていた５名もＣ１に上がりステイする。

9月28日、Ｃ１から９名が朝から休養にA•BCへ下る。前日Ｃ１に上がった５名と角田はＣ２迄の高度経験を踏んでから一気にA•BC迄下って休養に入る。ＢＣ以来全隊員が一同に会するのはこれが二度目で各テントからは夜遅く迄明かりが洩れていた。

本峰断念、ドーム登頂

9月29日、この日からいよいよ頂上攻撃に入る。２７日からアタックに備えて休養に下っていた山田、新郷、関、高瀬、藤岡の５名は第一次アタック隊としてＣ１へキャンプを進める。

他の１５名はA•BCにて休養、登頂に備えてノンビリと最後のレストを味わう。



9月30日、C１の５名はC２へとキャンプを進めてアタック前夜を迎える。

このC２からケダルナート本峰へのアタックは距離が長い上、ドームと本峰の間がコルになっていて帰途、登り返えさなければならないなどかなりシビアなアルバイトが懸念されたが、一応、翌日のアタックは、午前３時にC２を出発して本峰を狙う事としてトランシーバーで打合わせる。

第２次のアタック隊１５名は、C１に上がる。

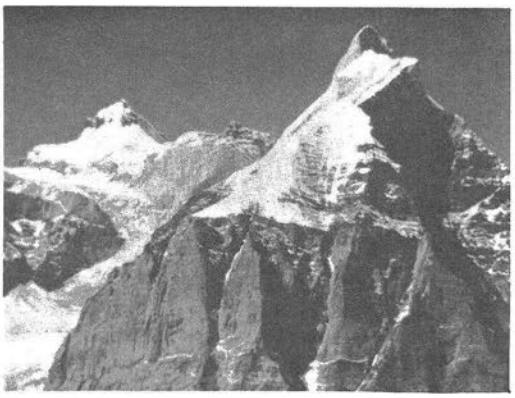
10月1日、アタック当日、C２入りした５名のうち藤岡は初めてのC２ステイで不調を訴え、アタックを断念する。山田が付添いで一緒に残る事になり新郷、関、高瀬の３名で第一次アタックをかける。午前３時３０分にC２を出発した３人は小１時間も進まないうちに余りの寒さに耐えきれずツェルトを被って暫くの間休む。この頃より高瀬も調子が悪くなり高瀬は独りでC２に引き返すことにし、残り２人でアタックを続行することになった。６時頃高瀬はC２に戻り、高瀬が引き返してきたので急遽、山田はアタックに向う。山田が２人に追いついた後、９時１０分、３人はドームの頂上に到達した。ドームから本峰へのルートは長く、時間的にも遅くなっていたので本峰は断念してドームで打ち切る。

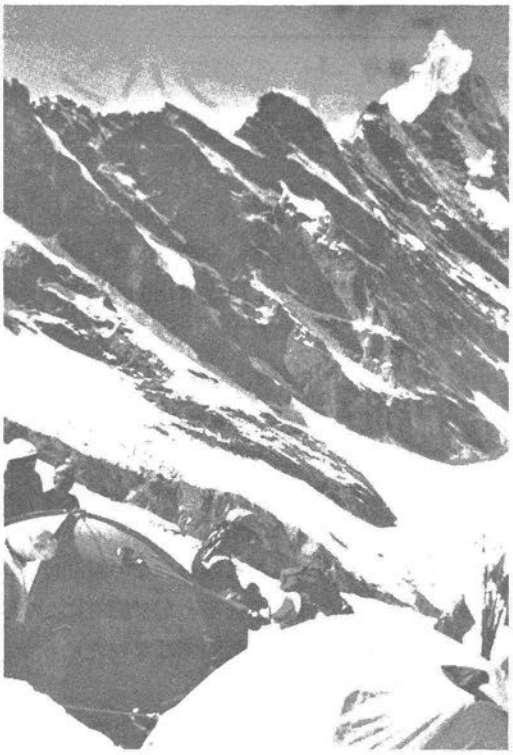
下降に際して関は、6,831mのドームの頂きからスキー滑降を行ない雄大なシュプールを描きながらC１迄下る。

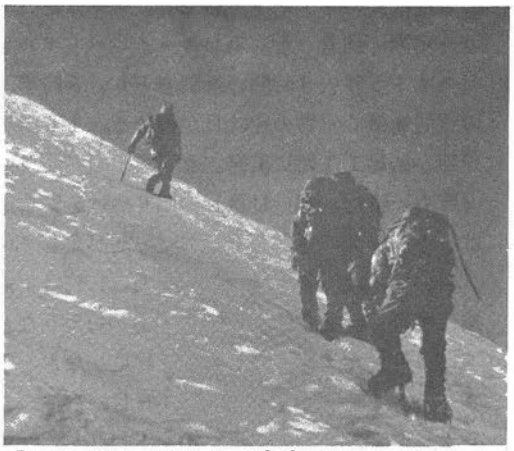
第２次アタック隊の１５名はこの日C２へとキャンプを移したが、C２への途中で飯田は不調を訴え、残念ながらアタック前にA•BCへ下ることになる。

10月2日、ファイナル・キャンプに１７名という今迄のヒマラヤ登山では例を見ない様な賑ぎやかなC２での一夜を過し、第２次アタック隊は全員でドームのアタックへ向う。サポートとして山田にC２に残って貰らい、６時４０分、C２を後にする。高度も6,000ｍを越すと雪面は締りアイゼンの領域となる。つい先日迄のラッセルが嘘の様に発達したシュカブラにアイゼンを利かして登ること約３時間半で頂上に辿り着く。

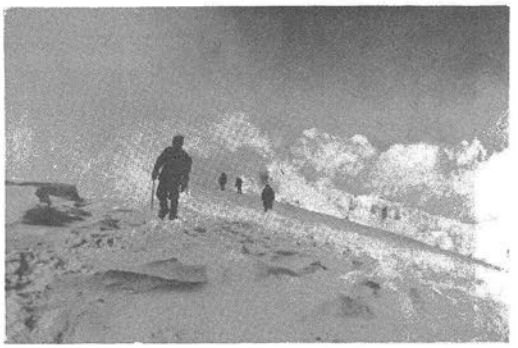
お決りの頂上での儀式も一度に１６名となるとなかなか大変である。生憎と北側は濃霧におおわ







㊤C１よりのブリグバント(左)とメルー ㊥C１とテレイ・サガール ㊦頂上に向かうアタック隊



▲頂稜を行く隊員たち

れ360°の眺望は得られなかったが、それでも充分満足できるような幾重にも連らなる重々とした山なみを眺めることが出来た。

頂上からＣ２への下降は１時間半程で無事に下り、早速、撤収にかかる。

Ｃ２撤収後、各自膨れあがったザックを担いで下山に着く。疲労の激しい７名がＣ１泊りとし、他の者は一気にA•BCへと下る。

10月3日、感激の一夜は明け、この日は全てのキャンプを撤収して全員ＢＣへ帰還する。

往路キャラバン

丸 誠一郎

ついに現われてきた。今まで、夢と写真でしか見たことのなかった、巨大な山塊が。ランカへの山道をバスに揺られながら、ガラス窓から見える白い峰々に思わず胸がいっぱいになる。今回の遠征隊は言わば寄せ集めだ。メニューで言えば、ダールとカレーに味噌を入れたようなゴッタ煮だ。皆各々が、自分の山登りを持ち自分の筆で心に描いたヒマラヤを暖めてやって来た。しかし、初めてヒマラヤの山を見たこの日のこの瞬間は、きっと「やって来たなー。登るんだ！絶対にこの足で」と、皆一緒にそう感じたのではないだろうか。

９月１４日　タラップを降りたとたんに鳥小舎のような臭いをブーンと感じる。４０分遅れでデリー空港に到着した。ホテル・インペリアルまでバスで１５分、３時間の睡眠をとり、８時半、表の玄関を掃く竹箒の音に目が醒める。１０時出発予定が結局１１時に出発。女子雪氷のバギラッティ隊も一緒だ。強い日差しの照りつける繁華街には、もう多勢の労働者（?）でごったがえしている。２台のバスは、クラクションを鳴らし続けて通り抜けて行く。昼食はドライブ・インのようなところに入り、ホテル製のランチを物足りなさそうに食べる。４時、キャラバン第１日目の宿泊地、リシケシに到着。初めて歩くインドの町だ。サモサとオレンジでおやつを済ませた。

９月１５日　コックス社は出発時刻を守ろうという観念が全くない。結局、今日も日が高くなってからの出発となった。今晩はウッタルカッシまでということで安心もしているのだろう。途中、峠の村で休み、リンゴやオレンジ、腹の足しになるものを買い込む。斉藤君と二人で、華憐なサリーをまとった若い女性に見とれていた。しかし彼女達は、恥しいのか奥床しいのか、レンズを向けると後を向いてしまう。ウッタルカッシは、映画館もあり大きな町だ。宿舎が小学校の前だったため、外へ出ると子供達がワーッと寄ってくる。彼らが盛んに「ジャポニ・ボール！ジャポニ・ボール！」と言うのに初めは首をかしげていた。ところが、今年のプレに兵庫勤労者岳連のシブリン隊が、バレーボール300箇を山村の子供達に寄贈したのを思い出し（ヒマラヤ106号）、手ぶらでやって来た我々としては少々気まずい思いをした。晩飯は、久々にうまいマトンカレーにありつけた。

９月１６日　毎日、紺碧の空だ。ガグナニまでバス。ガグナニからダブラニまで１４キロ、初めて歩きのキャラバンが出来た。この辺はかなり軍隊が入っており、橋等の撮影は御法度だ。ポーターの到着が遅く、ダブラニでは夕刻まで待ちぼうけを食う。先発の尾形隊長からの手紙を、下山中の他の隊のリエゾンから受け取った。赤旗用のバンブーを切って来るようにとの事だ。

９月１７日　ランカまでバス。バイロン・ガティまでちょっと歩き、２時にはもうガンゴトリに着いてしまった。シャワーを浴び洗濯をし、手紙も数枚書いた。夕飯までは山田副隊長、斉藤君の指導のもとにボルダリング大会、その後は寺院の中での日印合同盆踊り大会で大フィーバー。村人が大勢集まってしまった。夜はベッドでノミとの戦争となった。

９月１８日　体も天候も絶好調。８時に歩き始め、ボジュバサには１時到着。時々小雨がぱらつき始めた。１９キロとはいえ道は良いので楽だ。バギラッティⅡが眼前に聳え立ち、ブリグ・パルバットが雲に見えがくれする。日本の山のスケールとの大きなギャップをつくづく感じる。一休みして近くの丘を登り、3,950メートルまでの高度経験をした。自分にとって初めての高度という実感はまだあまりなかったが、この辺から樹木は完全になくなる分岐線だ。夕食前に、先発の尾形隊長、北出君両名が関氏をＢＣに残して下りて来た。体調を崩したとの話を聞いていたが、思ったより元気そうで皆ひと安心した。

９月１９日　今日からバギラッティ隊とも別れる。朝、お互いの無事と成功を祈っての惜別(?)。ＢＣ（4,350メートル）はシブリン東面の真下で、小川の流れる草原地帯だ。タボバンに置いた仮ＢＣの近くには、東洋大メルー隊、オランダ隊のＢＣもあり、人気はまだまだ絶えない。ポーターにより大半の個人装備もＢＣに集結し、ボジュバサへ帰幕した。夜は、大野お父さんの差し入れの梅干しを魚に、パニで酔ったふりをしていた。

９月２０日　曇。ゆうべの雨もお山の上はうっすら雪化粧。晩秋の涸沢を思い浮べる。朝、寝起きは頭痛がひどかったが、歩き始めたら治ってしまった。時々降る冷雨の中のＢＣ入りだった。隊長、副隊長初め６～７人は仮ＢＣに残った。

９月２１日　昨夜からの雪が正午過ぎまで止まず、積雪は少ないが昨日までとは一転銀世界だ。角田、関両氏でＡＢＣルート偵察。他はＢＣステイとなった。隊長以下仮ＢＣの一行も、夕方荷上げを完了して集結。ディナーは、リエゾン・オフィサー：ラジブ・ラジも混じえて大関特級をひとなめ、ささやかながらＢＣ建設完了パーティーとなった。

いよいよ明日からは本番だ。皆、少なからず緊張の色を隠せないようだった。メール・バマークのコルの上に赤いルビーのような星がひとつ、妙に明るく光っていた。自分の体の奥底から何かが湧き出るような躍動を感じる静かな夜だった。

▲頂上からスタートする関隊員

登頂とスキー滑降

関　久雄

真夜中の０時半、「時間だよ」の声にシュラフから出る。息苦しくて寝つけなかったので頭がぼうとしている。さえない一日の始まりだ。外は星が見えているがヒュウヒュウと風がある。ガスコンロに火をつけ雑炊を作り始めた。皆んな眠いのかぼんやりコンロの火を眺めている。藤岡氏は吐気がおさまらずＣ１へ下るという。パンパンに腫れた新郷さんの顔は別人のようで、おまけに咳で喉が潰れてしまった。悪いことに山田氏までが不調でどうしようかと腕組みをして考え込んでいる。

ここ、Ｃ２（6,270m）からケダルナート（6,940ｍ）までは高度差約700mだが、一旦ドームの右肩に出てそこから約100m下降してから登り返すロングルートだ。下降の個所が少し難しいらしく、本来ならルート工作するかもう一つキャンプを出したいところだが短期間のため今日、明日中に登

らなくてはならない。そこで結局主峰は取りやめ、ドームに関、新郷、高瀬が登り山田氏は藤岡氏と下るということになった。

3時半、C2を出る。僕はスキーを持っていく。見上げるとドームの上にオリオン座がまたたいている。昨日張っておいたロープを伝い上に出た所で休む。予想外に寒く風もあるのでツエルトを被る。足先が冷たく感覚がないので靴を叩いたりさすってみるがあまり効目はない。「寒いし眠いなあ」というボヤキが口を出る。そうこうしていると高瀬氏がC2へ戻ると言い出した。調子が良くないようだ。それじゃ無理しないで、と握手を交わし彼は下り始めた。眼下にCⅡの灯りが見え、彼のヘッドランプが揺れながら遠ざかっていく。風にバタつくツエルトの裾を巻き込み再びもぐり込む。「しかしダッチはのんびりしていたね」と、先日ドームに登ったオランダパーティの話になった。彼らはC2を9時に出て午後2時に頂上に立ったという。「こう寒くちゃ陽があたってから登ったほうが賢いというもんだな」と思う。彼らは女性2人男性3人でうらやましい位ヒマラヤをエンジョイしていた。「どうです新郷さん、C2へ一旦戻り暖かくなってから登り直しませんか？ドームやったら近いし…」と僕。「どっちでも良かですよ」と彼。少し考えやっぱり戻るのは軟弱だなと思い登り続けることにした。ツエルトから出ると空が白み始めていた。ドームの広い斜面をほぼ真直ぐに一時間程登り大休止。寒さにたまらずツエルトを被る。「早く陽があたんねえかなあ」と震えている僕に新郷さんがテルモスの紅茶を差し出してくれる。旨い！やがて周囲の山々がモルゲンローテに輝き始め頂きから裾へと広がっていく。残念ながら僕らのいる所に陽がさすまでは大分時間がかかりそうだ。再び登り始める。下る見ると1人登ってくる。「誰かな」「山田さんでしょう」果して山田氏だった。3人で苦しい登りを続けた。頂上は近いようでつかない。いいかげん嫌になる。息が苦しくて、足先が痛い。色んな事が次から次へと頭に浮かぶ。突然、「オーイ出たぞもう少しだ！」という声に振り向くと日蔭の斜面から抜け出た山田氏がピッケルを振っていた。陽光をあびたその姿はきらめいて浮かび上がり稜線の向こうに消えた。「あそこまでがんばろう」そう自分に言い聞かせまぶしい稜線に出た。靴をぬぐと山田氏が感覚の失せた足を両手で揉んでくれた。頂上はそこから左にゆるく登った所だった。9時20分着、「登頂成功！」の一報を送るとトランシーバーの向こうから期せずして「バンザイ」の声があがった。格別の感慨も無いまま周囲のパノラマをカメラに納めてスキーを履いた。この時ばかりは2人とも羨ましそうに板を眺めている。さあ滑降だ！斜面はクラストしていたり吹きだまりがあったり春の白馬岳の様な感じだ。2つ3つ弧を描くとそれだけで息が切れてしまう。下を見るとC2入りの隊員が点々と登ってくるのが見える。少し華麗な滑りを見せようとして滑り出した瞬間転倒し頭から落ちていった。ヤバイ！止まれ！止まれ！と必死で身をよじり、ガクンとシュカブラに当って停った。しばらくはそのまま息を弾ませていた。「いい格好しようと思ったのがだめだったんだ」「そうだ山は甘くない！」やがて雪を被い慎重に滑り出した。何度か転びながらC2に着くとそこには仲間の熱い握手と祝福が待っていた。

一つの山が終ってしまった満足感と虚脱感、それらを交互に味わいながら僕はゆっくりとC1へ滑っていった。

ケダルナート1980・公式報告会のお知らせ

下記のとおり公式報告会を開催致します。なお、11月のHAJ東京集会は、この報告会をもってかえさせていただきます。ふるって御参加下さい。

◇日時　11月27日(木) 午後7時～9時

◇場所　東京都勤労福祉会館（地下鉄日比谷線八丁堀駅下車徒歩1分

◇内容　登山隊報告
　　8ミリ、スライド上映
　　インドヒマラヤ最新情報

◇会費　HAJ会員は無料。会員外は200円。

※申込みは不要です。当日直接いらして下さい。

帰路キャラバン

山形正巳

私は、ＢＣに入った時体調を崩し、３日間出遅れたが、無事ケダルナート・ドームに登頂できたことは幸運であった。１０月３日に隊員全員がＢＣに下り、翌日よりキャラバンが始まる。

１０月４日　快晴

朝食は１０時、今日はブジバスまでの予定だがポーター達が上って来ず、やっと来た時には午後３時を回っていた。我々はその間、ボルダリング等で暇をつぶしていた。結局この日はガウムクまでとし、出発したが我々がそこに着いたのは６時頃で、最後のポーターが着いたのは８時近くになってしまった。又、ポーターの一部は知らされていないのかブジバスまで下ってしまった者もいた。この日の夕食は９時でマトンカレーであった。

１０月５日　晴れ

いつもの事だが、朝食はチャパティーの取り合いとなる。２０人分のチャパティーを焼くのは大変な作業と思われる。昨日の一部のポーターがBCより下りて来るのを待って出発する。今日はガンゴトリまでの19㎞をランチ無しで歩く。出発してすぐの沢で、洗髪やら、ひげ剃り、体を拭いて約２０日間の汗を流す。

遠くなる山々を振り返りながら、何かもの足りなさを感じてただひたすら歩いた。山腹には紅葉が広まり、冬が近いことを思わせる。

ガンゴトリに着いて、寺院の前の茶屋で、腹ごしらえをする。ポカリを食べ過ぎると腹がもたれるようだ。ここから見える雪に覆われたスダルシャンとガンゴトリ寺院が印象的であった。

１０月６日　晴れ

ガンゴトリを７時半にバスで出発、１時間ほどで降り、そこから歩いてランカまで行く、途中、水のきれいな渓谷が日本の渓谷を思わせる。又、道の下にはガンガ川が轟轟と流れ、渓谷美と相まって遊歩道を歩いている様だ。ランカに１１時に着く。ここからバスでダブラニまで行くがバスがくる間に各自思い思いに休む、広場の真中の平な石の上に隊員７～８人が休んでいる姿は、上野のサル山を思い出す。正面の岩でボルダリングを楽しむ、一緒になった外国人も入り、挑戦したが、結局登れなかった。バスは１時半に来て２時に出発した。途中ハルシルでロキシーを買う為に、ハイポーターのラジュとポーター１名が降される。ダブラニには６時着、巡礼宿に泊まる。星の下での夕食は今日が最後となる。１０時にラジュとポーターがやって来た。ハルシルよりダブラニまでは約２０㎞を４時間で来た事になる、早速彼らに感謝してロキシーを頂く、煙っぽく、それほど強くないが気持良く休む。

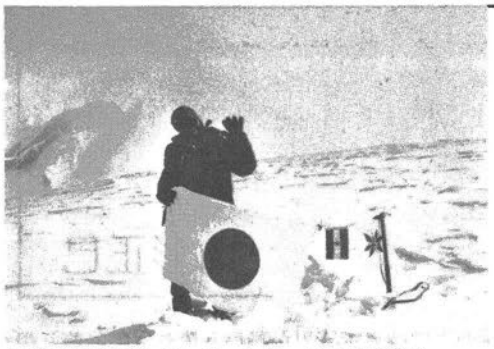
１０月７日　晴れ

今日は、ブキまで歩きバスでリシケシまで行く途中、道路の工事が急ピッチで進んでいる。ここが開通すればアプローチも短縮されるだろう。

ブキに１１時に着く、ここで道から少し上った診療所の様な所に整備された温泉に入る。湯温は４０℃位、イオウ臭くはないし湯量も多い。インドヒマラヤで温泉に入れるとは、最高の気分であった。しかしここでは湯に入る時に何かを身につけていなければならないそうだ。

来る時にはここまでバスは来られなかったが、道が補修された為、エージェントのバスが待っている。腹ごしらえをしてバスに乗込む。ウッタルカシを飛ばしてリシケシに午後の１０時に着いた。

１０月８日にニューデリーに着き、翌日タジマハルホテルでパーティーを開く。無事に登山が終了し成功した事に乾杯をする。



▲第２次登頂メンバーとなった木村隊員

登頂の感激

木村陽子

先頭を歩く角田さんの姿が稜線に消え、続く豊ちゃんの姿も。「あともう少し、頑張れ.!」と自分自身に言い聞かせながらラッセルされた頂上への道を一歩一歩踏みしめながら歩いた。やっと稜線の上までくるとみんながいない。左手へ歩いていく。「なんだ、ここではないのか」と少々落胆しながらも、みんなと同じように平らな雪面を歩き始めた。前方に、先に登った仲間の顔が見える。こちらを向いている。手を振りながら笑っている。叫んでいる。「そうだ。あそこだ、頂上は」、雪面と仲間の顔を交互に見ながら歩く。もう少し、もう少し……頂上だ。頂上に立っている。信じられない気持とうれしさで、私は仲間と抱き合って感激をわかち合う。後ろから仲間が続く。「○○さーん」私は、先の仲間がやってくれたと同じ様に叫ぶ。「頑張って.!」、また一人、また一人登頂者がふえていく。最後に、隊長の尾形さんの姿が見え、今日登山した全員が登頂したことを知る。「うれしい.!」みんなが同じ感激、感動を持てたことが。

実は、何をかくそう、五月の富士山合宿で、私は頂上に立つことができなかったのです。みんなが登山の様子を興奮と疲労の交った調子で話している中で、とても寂しい思いをしたことがあったのです。その後、この登山学校に参加しようかどうか悩んだ時期がありました。山行経験も浅く、ピッケル、アイゼンワークも今回が初めてだったのです。私にヒマラヤは遠すぎる。

でも、山を見るだけでもいい、キャラバンを経験するだけでもいい、とにかくヒマラヤへ行って見たい。この体で感じて見たい。そう自分自身の気持を整理したら気持が楽になり、“仲間に迷惑かけず登れる所まで登ろう”を私自身のキャッチフレーズと決め、参加することにしたのです。こんな私が登頂できるなんて。本当にうれしさで一杯です。

幸いにも、一度も高度障害にかからず、一日顔のむくみと、胃痛がひどくレストをとった程度で済み、体調の良さも私の登頂への大きなウェイトを占めていたようです。そして期間中天候も良くあらゆる点で私にとって恵まれた登山であったように思います。

今、この登山を振り返り考えることは、登頂できた喜びもさることながら、この登山を通し多くの仲間に出会うことができたすばらしさです。これらの仲間との思い出は、私の一生を通して、忘れることのできないものになるでしょう。一つ、一つの体験、経験を、一人一人の人との出会いを大切に、これからも新たな夢に向って生きていきたいと思います。

最後に隊長、副隊長、インストラクター、そして仲間の方々に感謝の気持を込め、心よりお礼を申し上げたいと思います。

—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

≪隊構成≫ **隊長** 尾形好雄(32) **副隊長** 山田昇(30) インストラクター 角田不二(28)
隊員 大野広美(37)、新郷信廣(36)、飯田徳治(34)、遠藤喜重郎(33)、宇佐美博康(30)、関久夫(29)、高瀬敏久(29)、菊池春枝(29)、野畑浩之(27)、山形正己(25)、丸誠一郎(25)、木村陽子(25)、熊谷洋(24)、斉藤光明(23)、藤岡明生(23)、村上豊子(23)、北出昭彦(22)。

東京都山岳連盟海外登山研究会報告

１０月２４日(土)～２５日(日) にかけて、都岳連ではすっかり恒例となった海外登山研究会が開催された。会場も例年どおりオリンピック青少年センターで、約８０名が参加した。以下はその報告である。

●10月24日(土)

斉藤一男都岳連会長のあいさつで開会し、参加者紹介があった後、3隊から登山報告が行なわれた。

①ラムジュン・ヒマール（法政大学）

プレモンスーン期にネパールのラムジュンヒマール峰（6,983m）の北稜の初登はん（頂上第4登）に成功した同隊の記録を、隊長の柏木恒造氏が8ミリを駆使して報告した。ルートは北稜の最上部が急峻な氷壁となっており、この間（Ｃ３～Ｃ４）のルート工作に苦労したとのこと。

②ケダルナート・ドーム（日本山岳会婦人部）

ポストにはＨＡＪの登山学校隊が登頂したこの山に、同隊はプレモンスーン期に登った。報告は隊長の高本信子さんがスライドを使って行なった。

③ジュトマル・サール（東京志岳会）

今夏、カラコルムはヒスパー山塊の未登峰ジュトマル・サール（7,330m）に78年に続いて２度めの挑戦で初登頂を手中に収めた同隊の記録。

報告は杉本忠男隊長によって、７８年からの経緯とともになされた。たった3人で、雪崩の危険の多い同ルートを巧みに登りきった報告は迫力があった。

●10月25日(日)

午前中は分科会形式で行なわれた。

①トレッキング許可で登れる山の諸問題

角田不二委員の司会で、藤倉和美、小松幸三両パネラーを中心に、渉外問題からざっくばらんに安く行く方法、また6,000メートル峰に短期間で少ないメンバー、少ない物資で登る際のタクティックス上の問題点などをディスカッションした。

②中国の登山の諸問題

来年は日本から１０隊と、今や人気絶頂となった中国の登山について、京都山岳会の遠藤京子さん、チョモランマ隊の磯野剛太氏、岡島成行氏（読売新聞社）を囲んで行なわれた。手続きのこと、高いといわれる経費の問題点、アプローチとトランスポート、また中国側の協力要員についてなどが話題となり活況を呈した。

午後からは、水野勉氏を講師にむかえて「中国の山々」と題する講演が行なわれた。現在解禁されている山を中心に、過去の探険と登山の歴史、今後の新ルートの可能性、地図の空白部についてなど、興味深い話題が提供された。

最後に本多昭一都岳連副会長のあいさつで、午後3時１５分閉会した。　　（文責：角田）

原稿募集

ニュース　ヒマラヤ（中央アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀　行　遠征、トレッキング、旅　etc……。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。“記録”ではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙６～８枚程度、横書きでお願いします。

日本からヒマラヤから　ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やＨＡＪに対する提言などもお寄せ下さい。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

★　投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★　送り先〒160東京都新宿区高田馬場3-23-1　淀橋食糧ビル506

日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

遠征学入門

XIX

実 践 篇

タクティックスについて(2)

清水　澄

ルート開拓のスピード

ルートに種々の工作を施しながら新境地にルートを延して行くことは、非常に楽しいことである。何となくフロンティア・スピリットを満足させられるのであろう。清浄な白一色の雪原に自己の足跡をつけることの雄大さは、ルート開拓に従う者の特権である。その楽しみの為に私などは冬山に行き、ヒマラヤに行く方なのかも知れない。

ルート開拓は工作物の多少によって、スピードが左右される。困難なルートは勢い工作物も多く要し、労力がかかる。工作物が少なくても、足場（ステップ）刻みを必要としたり、ラッセルの深い所もまた同じである。足場刻みは隊員の技倆、使用する期間、荷上げ物資の量などによって、大きさ、間隔などと共に要、不要が定められる。又シェルパなどの高所ポーターを使用すること、隊員でも極度に疲労した時のことを考慮して、安全に登降を約束してくれるものにしよう。バランスの補助にロープをセットする時は、結び玉を適度な間隔で作った方が有用な場合もある。氷壁だけでなく急峻な雪壁の堅雪にも足場刻みが必要となる。この場合は氷壁よりも仕事はやり易いが、距離は長くなることが多いので根気を要す。ルート開拓のスピードは速い方が良いに決っているが、手抜きをしてスピードを上げても、危険が潜在するようでは困るので、充分な検討をしよう。

ルート開拓がどんどん捗ると、前線への荷上げもどんどん行なわなくてはならない。荷上げが間に合わなくなれば物資不足となり、結局ルート開拓と工作は一時停止されてしまう。そして適度に物資が集積されるまで待つことになってしまう。これでは登山の能率は上らない。

逆に荷上げ物資はどんどん集積されるのに、ルート開拓がその困難さに阻まれている場合はもっと困る。登山の見通しが立たないあせりが隊員間に生じ、心理的な不安定が二次的な問題を生じさせ易いことが一つ、ムダな物が上ったりすることが二つである。

従ってルート開拓のスピードは遠征隊にとって相当に重要な問題である。ルートの延びと荷上げのバランスは、隊長や登はん隊長、荷上げ管理者などの大きな任務である。

ルート開拓のスピードを決める要素としては、地形、ルートの位置、傾斜、岩や雪氷の撰択などと、隊の技倆、人員、ローテーション、それに気象である。遠征の完結を直接に左右するだけに充分な検討と運営が必要となる。

荷上げの方法と適時性

ルートを開拓し、「道路」として通れる様に工作するに従い、前線を延して行く為に荷上げを進めなくてはならない。ヒマラヤ登山で一般的にとられる極地法では、前線に向ってキャンプが何カ所かに作られる。登山基地としてのベース・キャンプからルートの延びに従って、第1、第2、第3というようにキャンプが作られ、それぞれのキャンプは互いの間の交通を確保しつつ、前線への物資を送り、前線から帰った者の休養所となるのである。従ってこれら各キャンプが有機的につながり、連係を保たなくてはならない。前線への荷上げは補給の意味で重要なのである。ベース・キャンプから送り出される荷物は、下のキャンプほ

ど多い訳で、従って多勢で上へ荷上げしなくてはならない。最前線で必要とする物資は、すぐ下のキャンプに準備されているのが良いのである。

ここで当然理解出来ることは、荷上げは先の物資の必要性を見込んで、先行していなくてはならない点である。ベースからの荷物が最前線に着くまでに3日も、4日もかかるようになると「それ足りない、やれ必要だ」と云っても、すぐには間に合わない。その上、高所に行けば行く程、一人当りの荷上げ能力も少くなるので、なお更にことはむづかしくなる。充分な管理と計画性をもたなくてはならないのである。

荷を上げる行為そのものは単純な作業であるが、総体の管理となると、隊の規模が大きければ大きい程複雑になる。食糧、燃料の消費量の狂いや、ルートに必要となる装備の量は、常にチェックをして把握を心がける。これは一見簡単のようであるが、隊が30人、50人となるとなかなかに厄介である。キャンプ間は常に人が移動して人員が狂うので、一日当りの消費量は的確につかめず、それが1週間、10日となると全然わからないものになってしまい易いことを、知っておきたい。

荷上げ物資の順序としては、ルート開拓及び工作の資材が第一であり、次にルートが延びてキャンプを作ることになると、幕営、生活資材と次なるルート用の資材ということになる。これの繰り返しでルートが延び、キャンプが幾つか出来てアタック段階となる。アタックに必要な物資は、下部キャンプを転々と上げられ、最終キャンプが出来た時、間を置かずその下のキャンプから上げられる様に配慮されていなくてはならない。

荷上げでは上部キャンプで必要となる物がすぐに間に合う様に、そのすぐ下のキャンプにストックされていたい。その為には、計画的に次に必要になる物を見込んで荷を上げていることと、毎日夕刻に於ける各キャンプ間の無線通信による打合せが大切である。そうして大規模な隊であればある程、これの管理に当る者は、各キャンプの物資在庫量、消費量、補給量を台帳に記載して、その流れを的確に把握しなくてはならない。下部のキャンプ程、上部へ上って行く物資の通過量が多いので複雑さを増す。しかも各キャンプに滞在する隊員は、その日に上部へ上げた物資さえ憶えていないと云った事もあり悩ませられる。消費する食糧はレーション化すると比較的単純となるが、これとてしまいにはレーション崩れの半端物が多くなり、整理がつかなくなってしまい易い。

必要な物がすぐに揃ってこそ荷上げの適時性が保たれているというものであるが、それは一にも二にも管理能力の如何にかかっていると云ってよい。前進キャンプが2つ以下で済む様な中高度の登山では、さして問題とはならないことも、山が高くなればなる程に大きな問題として、クローズアップされてくる。

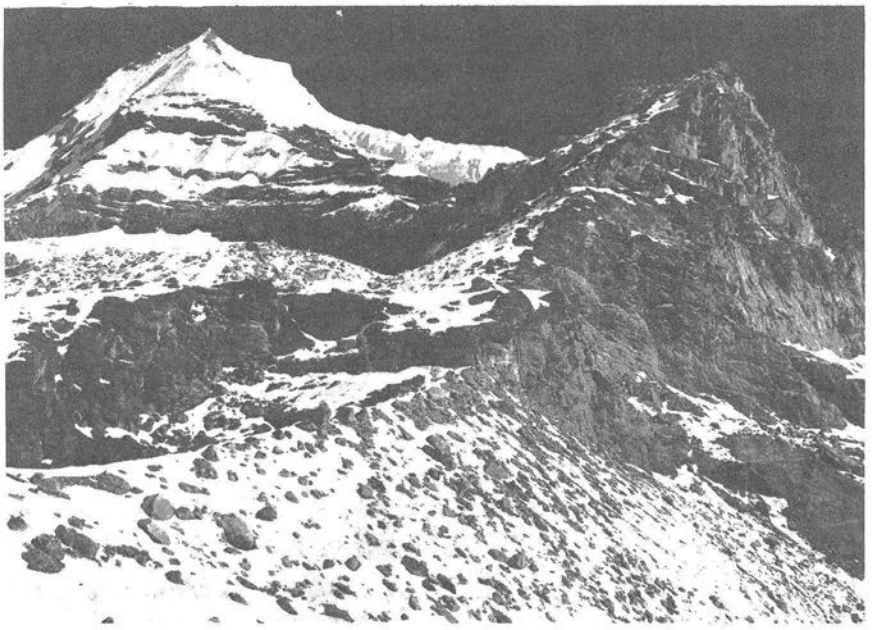
筆者がさる8,000m峰で行なった例を参考までに供してみよう。BCに於いては、前進キャンプに上る荷物をキャンプ毎に一目で解る様に、別々の場所に野積み（約6 ton）。C1建設2日目にC1入りし、順位をつけたC1物資をBCから荷上げしてもらい、中途からC2物資にした。C1物資の順位は、幕営、生活、食糧等をとり混ぜて1、3、4、6……とし、2、5はC2までのルート工作用の登はん用具や資材であった。C1がある程度、拠点としての機能を果す物資を集積したら、C2以上の物資を残りのC1物資よりも先に荷上げした。C2以上の物資はC1の物資とは別に野積みして混同を防いだ（約4 ton）。C1でC3以上の物資を再調整（計画の遅延等に対する処置）し、この時点で登はん、工作用具はキャンプ物資から外して独立させた。C1に於ける食糧、燃料等の消費量は、3日おきにチェックし、修正した。これはC2でも同様、以後は毎日とした。

C2は予定地到達後、3日間物資を集積してから建設し、直ちにC2入りして上部の工作、荷上げを司どった。ここでの方法もほぼC1と同じだったが、上部キャンプへの物資は更に厳しくチェックして、重量軽減を行った。以下C3でも同様であったが、ここではC4以上の荷物は厳選されていたので、その要はなかった。ちなみに最終のC5へは63kg（O_2含）の荷上げであったが、戦力としては、ギリギリの限界であった。筆者にとって管理は、前進キャンプでの方がやり易かった。自分自身が荷上げに加わって、前線を見て来れる安心もメリットであったようだ。

連載 3

ネパールヒマラヤ

トレッキング許可で登れる山



BCよりコンデ・リ・ロー峰と南稜末端のピーク

6187m コンデ・リ

岩橋崇至

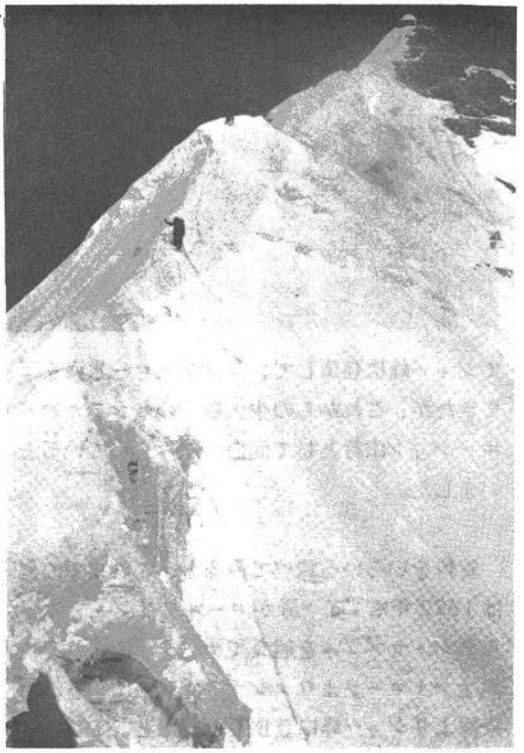
コンデ・リ（又はクワンデ）は、ロールワリン山群にあって、その東部に位置しており、主峰はロー峰（6,187m）とシャー峰（6,093m）の双耳峰からなり、北にヌプ峰（6,015m）、南にヌプラ峰（5,885m）を従えた山塊である。ナムチェから眺めるコンデ・リはボテ・コシ（BHOTE KOSI）の流れを隔てて、その東面の岩壁が城塞のように黒々とそびえている。その高度差2,000m近い岩壁は、圧倒的な風貌をしており、近寄りがたい感じを与える。

アプローチ

コンデ・リの登路としては、この威圧的な東面とは対象的な、牧歌的雰囲気を持つルンデン・コーラが良い。モロ峠（4,343m）、又はルンデン峠（4,516m）〔こちらは少し荒れている〕を越えて、ルンデン・コーラに入る。ここは夏の間、シェルパ達の放牧場になる所で、ルンデン・カルカには石積の家が3～4軒あり、彼等は、羊を追って上部のモレーン丘にまで上っている。峠から俯瞰する谷は、明るく開け、正面にはカリヨン、その左手にカタング、北は登路となる大きな滝のかかる壁となり、その向うに、真白なヌプが見える。ルンデン・カルカまでは小径がついている、カルカより滝までは、ルンデン・コーラの左岸をダラダラ登る。滝つぼからは、岩壁をへつるように踏み跡が草付きを昇っており、下部の滝を登りきった所で、流を渡りスラブに取りつく。さらに丘陵を登りきると、4,800mの氷河湖のある台地となる。BCは、右手の岩クズの重なり合ったモレーンを抜けた草地が良い。ここはコンデ・リを正面に、ぐるりをロールワリンの峰々に囲まれ、飲料に適した流水も近くを流れている。

BCよりAC

ルートは東のモレーン丘を登り、ピーク5,153mとピーク5,253mの間の小さな滝のかかる沢を



▶山頂直下の雪稜を登る

つめる。滝を抜けるとコンデ・ロー氷河の舌端の氷河湖畔に出る。この湖の左手を巻き、雪原をトラーバスして、南稜の基部に至る。ここからは氷河横のスラブ帯を登り、ピーク5,153mの北側のコルに出る。ここがＡＣとして良い。

ACより山頂へ

ＡＣよりすぐ上部は岩稜帯となる。ここは右手の雪渓に入り、岩稜を巻き終った所で、稜線に戻る。１ピッチほどの岩を越し、200mほどの雪稜を登ると、ルンゼになる。このルンゼとその上に続く雪壁は、50度前後の斜面となり200mほどのフィックスのほしいところで、ここを登ると、山頂へ続く上部雪稜末端の小さな台地に出る。雪稜はこの先、左手より突きあげる尾根と合流する付近より、急傾斜のナイフリッヂとなり、風の影響を受けて、雪庇となっている所もある。ここから山頂にかけては、左手はヌプ氷河まで約1,000ｍほど切れ落ち、右手はコンデ・ロー氷河のクレバス帯が広がり、高度感のある登りとなる。山頂直下には、20mほどの岩峰が出ており、取りつきが悪い。山頂は狭い岩峰で１人がやっと立てるほどである。

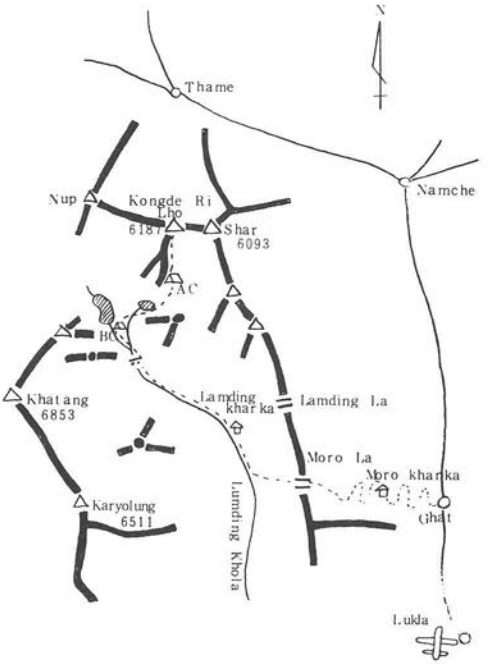
シャー峰へは、上部氷河湖よりコンデ・ロー氷河に入り、ロー峰とシャー峰のコルに出て、シャー峰に至るルートとロー氷河より南々東稜に取りつくルートが考えられる。このコルからロー峰へは、ＢＣより眺める限り可能性のある稜線だが、山頂から俯瞰すると、山頂に続く雪稜はカミソリのように薄いナイフリッヂで、起伏も大きく、大変困難なルートである。

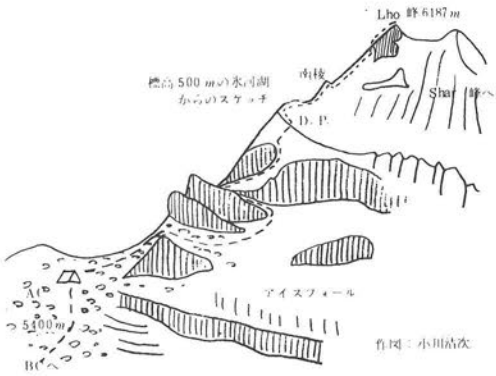
コンデ・リを登るにあたって

キャラバンがなく、いきなり登りにかかる為、モロ峠を越す時に、十分高度順化をしてから、ルンデン・コーラに入ること。峠を越してしまうとまるで別世界に入った感が強くなり、アクシデントのあった時、峠を越えることは大変である。

ＢＣへの登路である滝のある場所は、雪がなければ、なんでもない所だが、一度、雪が積ると、最悪のスラブと草付きになる。又、ズック靴をはいたポーターにとって、峠越えは、最もきらう条件なのでなかなか動いてくれない。

気温は、１０月下旬までは、下ってもＢＣで－１０℃位だが、１０月中旬になると、－１５℃～－２０℃位まで下ると見た方が良い。コンデ・リの登路は南西面に広く開けている為、日が当ると





◀登頂

みるまに気温が上り、降った雪も、1日でほとんど消えてしまう。しかし雪原は、雪が降るとルートは消えて、新しい道をつけるのが大変なので、標識を沢山用意した方が良い。途中のモロ・カルカ付近に適当な竹がある。

ACから上部は、我々が登った時は、記録もなく、情況もわからない為、より安全を期すため、600m持っていったフィックスを全部張って登ったが、ルンゼから雪壁にかけての200mと、雪庇の張り出している付近200mほどは持って行った方が良い。

ハーケン類は、ロックハーケンとスノーハーケンを少し使用したが、一番役立ったのは長いスノーバーで、25本では足りないぐらいであり、フィックス張ったあとは、ユマールの偉力は抜群であった。

コンデ・リの東面からは、岩稜が何本もあり、魅力ある岩壁だが、かなりのアルバイトが必要。我々が、ルムデン側から、登頂をねらっている時に、イギリス人の2人がターメより、9日間かけてシャー峰に登頂して、コンデ・ロー氷河を下りてきたが、これからの少人数でのヒマラヤのバリエーション山行として面白い試みをしていると思いました。

資料をいろいろ調べてみると、これまでの記録は1972年にドイツ隊がロールワリン・チューからテシ・ラプツァを越えてナムチェに入り、ルムディン・コーラよりコンデ・ロ氷河に入り、南南東稜よりシャー峰に登頂した記録と、1975年のポスト・モンスーンに日本・ネパール合同隊がネパール国王の戴冠式を記念して、やはりシャー峰に登頂した記録があるだけで、主峰のロー峰には記録が残ってなかった。トレッキング・パーミションで登ることが解禁された1978年の最初のパーティの1つであった我々3人が、コンデ・リの主峰を訪れた最初のパーティであった。ドゥ・コシに沿って、クンブに入る登山隊がまず目にする山はコンデ・リの最南端にあるヌンブルで、ナムチェ西に聳えるこの山塊の主峰が、これまで未登であり、それに登頂できた我々は幸運であった。

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より広募したものを、毎月一作づつ掲載する予定でおります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

≪規　定≫

(1)モノクロでキャビネ判以上であること。

(2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。

(3)未発表であること。

(4)なるべくあまり知られていない角度からの写真、あるいは未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見うけられるような写真（例：カラパタからのエベレスト）などは御遠慮下さい。

≪送り先≫

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号
HAJ「ヒマラヤ」編集部

寸感

★春につづいてまた1カ月ほど編集をあけてしまいました。出かけた先のガンゴトリはまさに日本隊ラッシュ。トランシーバーをONにすると、日本隊どうしの混線があったりして「こりゃあ正月の穂高だな」などといってニガ笑いしたものです。そんな中でちょっと異色だったのが、オランダからやってきた5人組。男3人と女2人のパーティーで、40年配の隊長さんは「ワタシタチハヒマラヤヲエンジョイスルタメニヤッテキマシタ。ダカラ、サムイアサハウゴキマセン」などとのたまってらっしゃる。行動開始は常に午前9時。アタックの日でもこのペースを崩さない。それでもちゃんと5人全員ケダルナート・ドームに登って来ました。そうして皆とても楽しそうなのです。気負いもてらいもなく、たんたんと自らの山登りを楽しんでいるという感じです。個人個人が自分の行動に責任を持ち、他人に頼らず迷惑をかけないという姿勢と力がなければできないことですが、何か本質的なところで日本人にはあのようなムードが欠如しているような気がしました。　（F）

事務局日誌（10月）

1(水)登山学校隊ケダルナート・ドーム(6,831m)に登頂、第1次3名。
2(木)第2次登頂16名。
11(土)登山学校隊帰国。
13(月)「ヒマラヤ」11月号刊、発送。
23(木)カンチェンジュンガ企画会議（資金検討）
25(土)日本ヒマラヤ会議高知会場開催。
26(日)日本ヒマラヤ会議福岡会場。
27(月)長崎ヒマラヤ集会。
30(木)東京ヒマラヤ集会。

ヒマラヤ No.109　(12月号)

昭和55年11月10日印刷　55年12月1日発行
発行人　柴田金之助
編集人　角田不二
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
淀橋食糧ビル506号

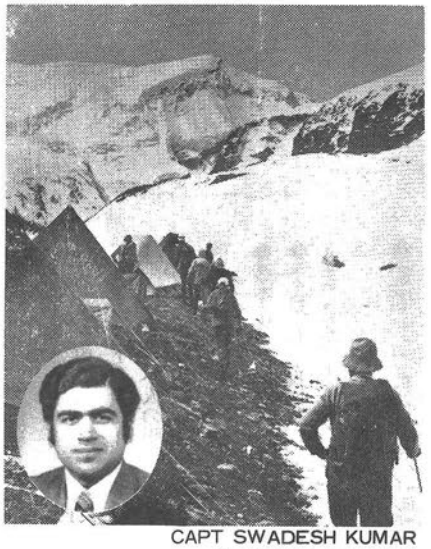
郵便振替　東京 0-48954「日本ヒマラヤ協会」

Shikhar Travels

―― シカール・トラベル ――

〝魅惑の
インド・ヒマラヤ〟

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

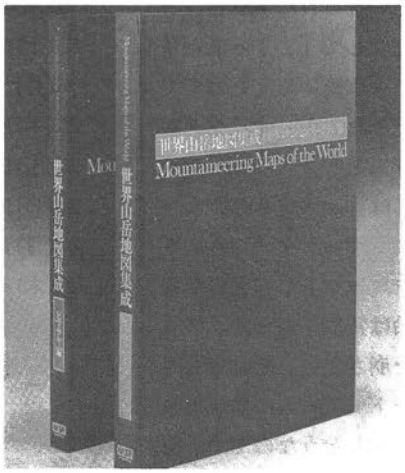
Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,
26 barakhamba road new delhi-110001
tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE
Branch office:Gangtok
Camp office:Joshimath & Uttarkashi

学研の山岳地図集成シリーズ

永遠の標的ヒマラヤ・カラコルム連峰を世界で初めて集大成

世界山岳地図集成 全2集



監修＝吉沢一郎

世界の登山家の夢であるヒマラヤ・カラコルム連峰が全地域大縮尺で集大成されたのは世界でも初めてである。美しいレリーフ4色地図とカラー写真、ルート解説など最新の情報が山岳愛好家だけでなく興味をそそる。

カラコルム・ヒンズークシュ編

《縮尺＝約1:180,000》
編・著＝高木泰夫／宮森常雄
カラコルム／カシミール・ヒマラヤ／ヒンズークシュ／パミール天山の主要山岳を二四図収録
●B4判（364×257ミリ）／上製本／箱入り●総頁350頁／見開き地図24点／カラー32頁／折込6頁

ヒマラヤ編

《縮尺＝約1:200,000》
編・諏訪多栄蔵・薬師義美ほか
ブータン・ヒマラヤ／エヴェレスト／マナスル・ヒマールなど二五図収録
●B4判（364×257ミリ）／上製本／箱入り●総頁328頁／見開き地図25点／カラー32頁／解説196頁）

●全2集セット
現金価格（定価）＝40,000円
分割払価格＝43,200円
（支払期間10ヵ月／支払回数10回／実質年率17.0%）

ヨーロッパの高山植物

ヨーロッパの名峰を彩る植物260種を紹介

■大場達之

アルプスを中心に、ピレネー、スカンジナビア、アイスランドなどヨーロッパの主な高山にはえる高山植物を日本人の眼でとらえ298点のカラーで紹介。巻末で各植物の解説をするとともに山の概要や植生なども記載。

●造本・体裁
●A4判（297×210ミリ）／上製本・箱入り●総頁数184頁（カラー144頁・解説40頁）●収録カラー298点

●定価＝7,500円

発行 学研 学習研究社

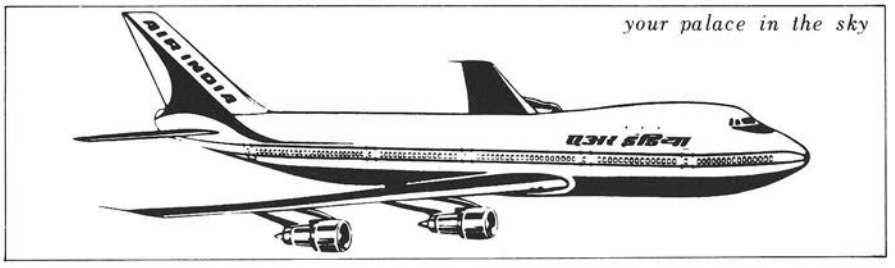
●内容見本ご希望の方は下記宛ご請求ください。
㈱学研美術販売
〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎東京(03)720-1111(代)

ヒマラヤへの装備

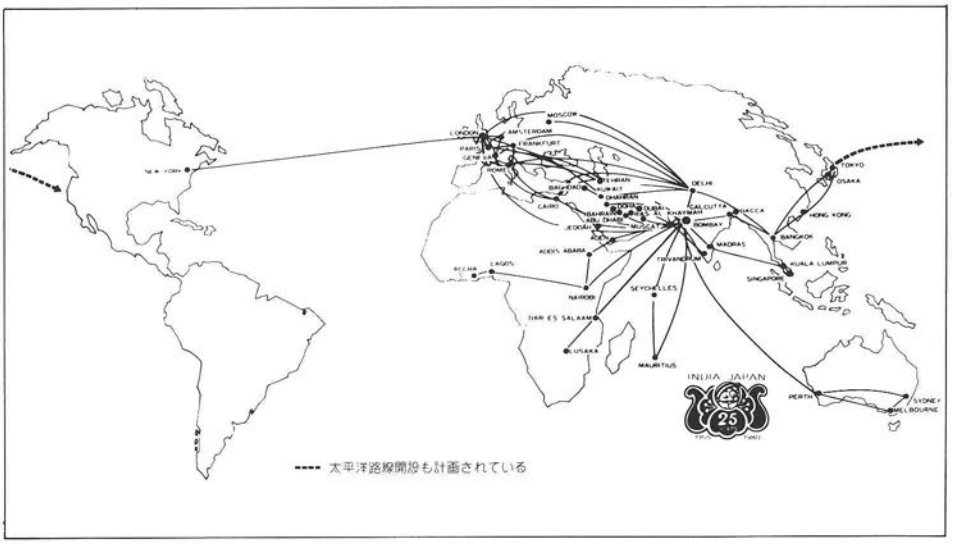
⊙遠征隊の装備、相談にのります。

ICI 石井スポーツ

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2 — 2 — 3 ☎03 (208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1 —16— 7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 — 8 —14☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 — 8 — 6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2 —123☎0486 (41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2 —19—10東和ビル内☎03 (200) 7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の秤井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7－35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052)583－0747

世界の43都市をネットする

エア・インディア

東　京	●千代田区有楽町日比谷パークビル	〒100☎(03) 214-7631
横　浜	●中区常磐1－2関内日本ビル	〒231☎(045) 651-2874
大　阪	●東区備後町松豊ビル	〒541☎(06) 264-1781
神　戸	●葺合区布引2－1－3新布引ビル	〒651☎(078) 222-1919
福　岡	●博多区博多駅前1－3－21八重州ビル	〒812☎(092) 471-7172

昭和五十一年五月第三種郵別物認可　月刊「ヒマラヤ」十二月号　昭和五十五年十二月一日発行　通巻百九号　発行　日本ヒマラヤ協会　定価五百円